

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370128

研究課題名(和文)近世御用窯における釜山窯の系譜

研究課題名(英文)Study on influence of Busan kiln in Japanese kilns

研究代表者

片山 まび(KATAYAMA, MABI)

東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：80393312

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究は釜山窯の日本陶磁への影響について、様式・窯業技術・人的ネットワークの3点から考察した。様式においては、釜山窯は日本各地の高麗茶碗写しの様式を主導したが、いっぽうで日本陶磁は本来的な装飾ではない削目などを強調する傾向が強く、さらには装飾のひとつとして取り込んでいった。窯業技術においては、釜山窯では終始一貫して朝鮮陶磁の技術を主体とし、日本陶磁ではその独自の技術によって高麗茶碗の写しを行った。釜山窯の様式が高麗茶碗写しの規範となりえた背景には、その受容者が将軍、幕閣など政治の中枢に釜山窯の茶陶が取り上げられたこと、狩野派の下絵を用いるなど言わば「官窯」としての性格をもっていたことにある。

研究成果の概要(英文): This study examines the impact of the Busan kiln on Japanese pottery in terms of three points; form, techniques, and personal networks. In regard to form, the Busan kiln spearheaded the form of the Korai Chawan replication right across Japan. Japanese pottery had a strong fundamental tendency to emphasize features such as burring, which is not for decorating purpose originally, and then came to incorporate the features as one decorative form. In terms of techniques, the Busan kiln took the techniques of Korean pottery as its main modus operandi, replicating the Korai Chawan with techniques that were distinctive in Japan. The Busan kiln's form becomes the standard for replication of the Korai Chawan. The background factor that made this possible was that the recipient end users of the Busan kiln's tea bowls included key political players; featuring sophisticated aspects such as employing designs by artists of the Kano School, these objects had the character of "official pottery".

研究分野：美術史

キーワード：倭館 釜山 茶陶 朝鮮

1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 21～24 年度の科学研究費(基盤研究)の助成により、17 世紀から 18 世紀にかけて対馬藩が朝鮮半島に置いた外交施設、倭館内にあった釜山窯で焼かれた、いわゆる御本茶碗を取り上げた。本研究では、釜山窯では日朝双方の技術と様式が取り込まれたこと、この二国間の技術と様式の併用こそが高麗茶碗の新様式を生みだすうえで重要な役割を果たしたことが明かとなった。

このような新知見が得られるなかで、17～18 世紀にかけて日本陶磁のなかで御本茶碗の模倣とされるもの、すなわち「写し」の問題を扱う必要が生じてきた。従来の研究では、御本茶碗の「写し」は、言葉どおり朝鮮陶磁から日本陶磁への影響という一方向しか考えられてこなかった。しかし今回、申請者が発見した釜山窯出土片が物語る事実は、むしろ朝鮮陶磁と、諸大名の好みやその御用窯が双方向に影響を与えつつ新様式を生んでいる可能性であった。

日本の近世陶磁は重層的な相互の様式・技術の影響のもとで展開したが、その系譜の解明については、京焼や肥前などの大規模窯の様相が明らかとなった今、ようやく準備が整った段階にあり、もっとも研究すべき重要な課題とされている。近世において肥前磁器がすべての日本の磁器、京焼が陶器のモデルであったように、釜山窯もまた「高麗茶碗写し」を貫くものであった。すなわち、釜山窯を諸大名の御用窯の比較の軸とするならば、肥前や京都といった二大潮流ではなく、釜山窯の系譜につらなる御用窯を提示し、今日の近世陶磁研究に新たな切り口を提供できるのではないかと発想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、釜山窯と日本国内で焼かれた御本茶碗の「写し」について、その相互影響関係を「(ア)様式(イ)技術(ウ)受容」の三つの側面から考察し、日韓双方の陶磁器における御本茶碗の写しがどのような意義をもったのかについて明らかにすることとした。

3. 研究の方法

研究方法は国内と国外の実地調査による。

国内調査では、対馬・出雲・因幡・瀬戸美濃・肥前などの各地の御用窯出土片および伝世品の調査と江戸時代に相当する日本の消費地遺跡出土の朝鮮陶磁を主体とした。

国外調査では、韓国国内における官窯や釜山窯に関連する地方窯跡出土片、消費地遺跡の出土品、伝世品、史料調査の熟覧を中心とした。

そのほか狩野派絵画との関連について下

絵調査や資料収集、釜山窯に関連する大名等の蔵帳や宗家文書や近代の文献など、史料収集と調査を行った。具体的な研究調査先は以下のとおりである。ここに名前を記すことはかなわないが、調査に快くご協力をいただいた各研究機関の皆様に深く感謝を申し上げたい。

平成 25 年度：釜山博物館・韓国文物研究院・釜山近代歴史館・釜山大学校博物館・梁山博物館・京畿道陶磁博物館・韓国国立中央博物館・大東文化財研究院・大成洞博物館、大阪市立東洋陶磁美術館・大阪府立中之島図書館・高麗美術館・大村市教育委員会・長崎歴史文化博物館・長崎県立図書館等。

平成 26 年度：韓国国立中央博物館・梁山博物館・韓国文物研究院・釜山近代歴史館・東亜大学校博物館・愛知県陶磁美術館等。

平成 27 年度：関西文化財協会・堺市教育委員会・手銭記念館・島根県立美術館・韓国文物研究院・尚州博物館・釜山博物館・東洋文物研究院・ソウル歴史博物館・韓国国立中央博物館等。

平成 28 年度：福岡市埋蔵文化財センター・米子市埋蔵文化財センター・山陰歴史館・米子市立図書館・九州陶磁文化館・対馬市教育委員会等。

平成 29 年度：民族文化遺産研究院・九州国立博物館・東京大学・伊万里市教育委員会・嬉野市教育委員会等。

4. 研究成果

(ア) 様式における影響関係

日本陶磁において御本茶碗と関連のある窯跡出土品もしくは伝世品について、対馬諸窯、楽山、御深井、肥前、土井の浦、萩、八代についての調査を行った。その結果、17 世紀段階と、17 世紀末から 18 世紀初の 2 段階が見られると考えられた。

17 世紀においては、御本茶碗でも象嵌青磁・印花粉青・刷毛目粉青といった 15～16 世紀など「白化粧による文様が明確な様式」が御本茶碗と日本陶磁に共通して写されていることが明らかとなった。いっぽうで日本にもたらされた数の少ない鉄絵粉青・搔落粉青・線刻粉青・粉引粉青などについては写しが行われぬ。つまり高麗茶碗のなかでも日本で広く知られており、井戸などの装飾がないものではなく、白化粧装飾による明快な特色をもつものが写されたと言える。さらに日本陶磁の写しにおける特徴は、削目や目跡などの本来的には窯業技術的な要因から生じた祖形の特色が誇張して写される傾向が強まること明らかとなった。ただし御本雲鶴については、単に象嵌青磁のみならず、当期の花鳥画との関連がうかがわれた。

17 世紀末から 18 世紀初にかけては、いず

この窯も京焼の影響が顕著となるなか、仁阿弥道八などが忠実に写しを行っているものの、印花や刷毛目は装飾の一部として日本陶磁のなかに組み込まれていく。そのいっぽうで、前代とは反対に御本茶碗において京焼の写しが行われるが、(ウ)に述べるように老中などの幕閣と密接な関係にあった御本茶碗では、狩野探幽・常信などが下絵制作に関わったとされる。確かに狩野派の筆致と一致する作例がいくつか存在することが明らかとなった。その画題を幕閣および諸大名の蔵帳と照合すると、三副対に伴う松鶴・福祿寿など共通する文様が多いことがわかる。これらは単なる吉祥文とは言えず、武家の好みが強くと反映されている可能性を改めて確認するに至った。

(イ) 窯業技術における影響関係

窯業技術と一口に言っても様々であるが、本研究で最も重視したものは窯詰技術である。平成 26 年に発表した韓国・東亜大学校博物館所蔵の釜山窯出土片は、その多くが窯道具であり、ハマを除いてほとんどが在地の技術影響であるとの結論を出した。しかし匣鉢に関しては、釜山窯に派遣されたとされる慶尚南道の窯跡では出土がみられず、広州官窯窯跡出土の匣鉢について追加調査を行った結果、その直接的な影響をうかがうことができた。いっぽうでハマについては日本陶磁からの影響と考えてきたが、在地の窯跡でもやや時代が早いながらも同様のハマが出土しており、必ずしも日本陶磁からの影響にのみ限定しえないのではないかと結論にいたった。同様のことは日本陶磁においても言え、多くの窯ではそれぞれが固有の窯業技術をもって「写し」を行うことがわかった。その意味では、技術的な影響は御本茶碗については少ないことが明らかとなった。このことは在地の陶工が釜山窯の技術を終始一貫して担ったことを逆説的に証明するものであろう。文禄・慶長の役以後、九州をはじめとする各窯でいわゆる「朝鮮陶工」の技術系譜は下火となっていくが、釜山窯ではそれが維持されるという、対馬藩ならではの事情をうかがうことができる。

(ウ) 受容

御本茶碗を受容した人物は、将軍をはじめとする幕閣、諸般大名、京都の寺院関係者などであり、藩内に陶磁器生産をもたない武家がほとんどである。さらには将軍や幕閣といった最上位の人物たちが中心となっていることが改めて注目された。こうした人的ネットワークを背景として、下絵制作にあたった絵師についても、狩野探幽・常信といった狩野派の頂点をなす絵師が関与していることが注目される。その意味では釜山窯は、一種の「官窯」的な性格を持つものであったと言え

よう。

(エ) その他

そのほかの研究成果としては、従来、まったく場所や製品の概要がわからなかった古館に築かれた窯について初めて明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

片山まび、金海陶磁にみる朝日関係、韓国禮茶学 6、円光大学校禮茶学研究所、査読有、2018、pp.1-13 (韓文)

片山まび、異境の日本窯 「倭館窯」の成立と展開を巡る試論、陶磁器の考古学、高志書店、2018、pp.59-83

片山まび・永井正浩、東亜大学校博物館所蔵釜山窯出土片についての考察、博物館研究論集 22、釜山博物館、2016、pp.125-183 (韓文)

片山まび、釜山古館窯についての考察 位置、技術、その意義を中心に、東洋美術史学 3、査読有、2015、pp.49-88 (韓文)

片山まび、日本出土の慶尚南道陶磁 11 世紀から 18 世紀まで、機張陶磁、鼎冠博物館、2015、pp.124-135 (韓文)

〔学会発表〕(計 4 件)

片山まび、朝鮮時代金海陶磁器から見た朝日関係、主管：円光大学校東洋学大学院、2017

片山まび、講演 対馬と朝鮮を結んだ陶工たち 釜山窯研究の最前線、対馬市、2017
片山まび、16～17 世紀中韓祭器と日本茶器考察、清華大学、2016

片山まび、講演 やきもの日韓交流 釜山窯の過去と現在をめぐって、韓国文化院、2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

片山まび (KATAYAMA, Mabi)
東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：90706714

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

北野良枝 (KITANO, Yoshie)
永井正浩 (NAGAI, Masahiro)